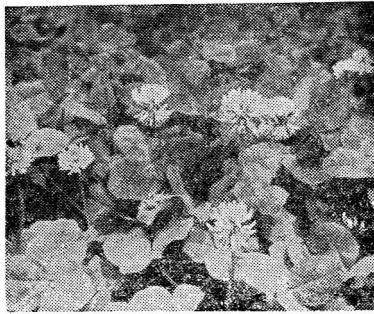


# 最も重要化して来た

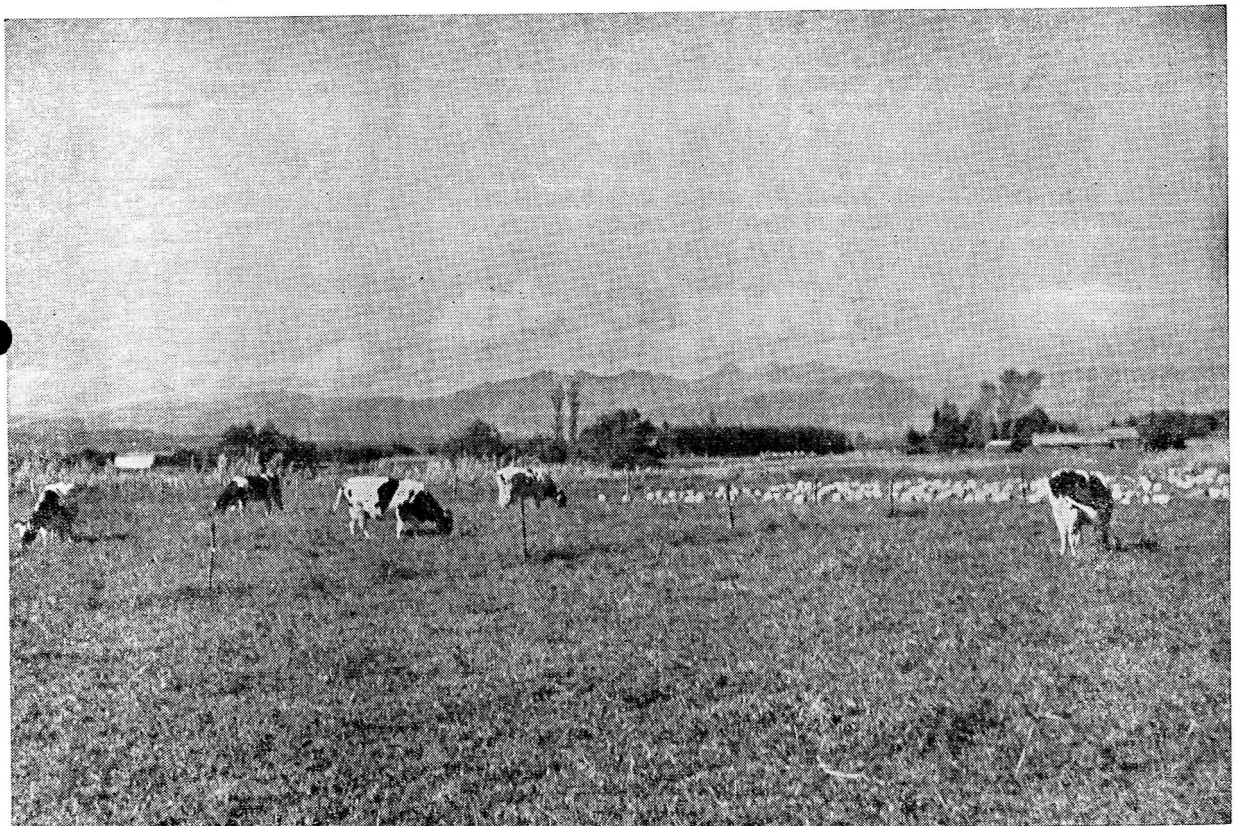
## ラデノクロバターの栽培と利用……………二

ラデノクロバリーが日本で奨励され初めてから七、八年になるが、これを實際利用する農家に普及し、その関心を集めるに至つたのは此一兩年のことであるが、酪農経営が飼料経済と労力経済が平行的に合理化されなければ成り立たないことから考えれば、これ程能率的な作物はない。前記の表において見る如くその反当生産量の多いこと、飼料成分から見ても蛋白質含量が非常に多いばかりではなく、石灰分にも富み、且つ家畜の嗜好、消化が極めて良好である。また土地を比較的選ばず、その蔓延力と再生力は他牧草の追隨を許さない点で、正に放牧草として最適のものである。しかしこれを青刈用として栽培した場合においても適当な温潤地であれば、北海道においても四〜五回の刈取で反当四〜五千貫の収量を挙げており、また最近岩手県や福島県、あるいは長野県等の熱心な酪農家においては六〜八回の刈取りにて、反当八千貫以上の驚異的生产を挙げていることから見ればラデノクロバリーの利用価値が極めて高いことがわかる。しかし酪農経営が労力経済を重視しなければならぬことから考えれば、やはり放牧地用とするのが有効且つ能率と言へる。最近電牧を利用する輪換放牧が普及しつつあるが、放牧地を大体三〜四区に分け一区毎に家畜を集団放牧して次々と区を移動させる方法をとるのである。この場合乳牛一頭当りのラデノクロバリー畑は幾らにすればよいか!! これは土地の肥瘠や気候等立地条件によつても異なるが、北海道では一反五畝〜二反歩、東北地帯では一反〜一反五畝、暖地では一反歩あれが十分である。放牧に当つてはひとり乳牛に限らず豚、細羊、鶏にも嗜好良くその飼育可能数は一反歩で豚、細羊は三〜五頭、鶏は約一〇〇羽前後を飼育収容することができよう。以上はラデノクロバリーの放牧用及び青刈用について主として述べたがその強靱さと緑肥効果を利用して、水田畦畔、路傍堤防、河川敷の牧草化、あるいは果樹園、桑園の下草として栽培し、飼料として生産利用は勿論、土壌の侵蝕防止、被覆作物、緑肥作物として活用することも極めて効果的である。



ラデノクロバリーの生育状況

ラデノクロバリーの栽培は極めて容易であるが、次の点に留意すれば一層好成绩を挙げることができる。まず土地の準備であるが比較的水分を必要とするから寡雨地帯では土壤水分の豊富なところを選定するとよい。また多年に亘つて利用するのであるから、播種前の除草、堆肥の施用特に石灰及び磷酸分を要求する作物であるから、これらを十分施用することが望ましい。種子は微細であるから播種前の整地は懇到にすること、覆土は浅くすることが必要である。単播が一般に行われているが、赤クロバリー、アルサイククロバリー、ルーサン、チモンシー、プロムグラス、フェスキュ類、ライググラス等と混播すると成績がよい。ここに全国の需要者の皆様に優良牧草の筆頭として、ラデノクロバリーを本年の飼料作物計画の基調として取上げることが推奨されるものである。



ラデノクロバリー畑に簡単な電氣牧柵を設けて放牧中の乳牛群（弊社上野幌育種場）  
北海道でも晩秋積雪迄放牧が可能である（遠方に白く見えるのはボンキンの園場）